夢と希望の美術館

大野　彩

このたびの勝山のこと、びっくりされた方も多いかと思います。私自身もあまりのスピードに追いついておりません。

2018年11月1日緊急入院したとき、はじめは２週間分の病室予約でした。
勝山はそこで自らの病と向き合い、積極的に先進医療を受け入れて、日日を過ごしたのです。そして最期の日、12月29日まで、懸命に頑張ってくれました。
私が毎日病室へ行くと、「来てくれてありがとう」、と必ず言ってくれました。
ところが私は、不自由な目のために読めない手紙や書類を勝山に読んでもらうことになりました。勝山にはかえっていろいろ助けてもらっていたのです。
私は帰り際には、必ず「ありがとう」、とお礼を言いました。

病床で勝山が私に語りかけてくれた最後の言葉があります。
「貼って下さい！」
想像するところ、夢うつつのベッドから、最近フレスコ画風を模索していた私に投げかけてくれたヒントの言葉のように思います。それは《コラージュ》という手法です。
人が生きるということは、常に**夢と希望**をもって前へ進んでゆくことではないかと思います。わくわくして日々を生きることだと思います。

生前、勝山は私が欲しがっていたフレスコ美術館をつくりたいと言っていました。私はフレスコだけではなく、勝山の写真美術館も欲しいと思います。
この企画に、
勝山のお別れの会の指揮をとって下さった友人桂田氏は、勝山の小中高校の友人であり、音楽ディレクターです。かれは、二弦の楽器（リュート）を演奏し、楽器もたくさん所蔵しています。その貴重な楽器群も展示させてもらえそうです。その又友人の岡村氏も広報として参加下さることになりました。

勝山は入院中、**「夢と希望の闘病生活！やりましょう」**と決心していました。担当の医師にもそう伝えて頑張っていたのです
100年にも及ばんとしている古い古い我が家（大田区南馬込四丁目）の一角に、ぜひともフレスコ・写真･楽器を展示する、

「夢と希望の美術館」をつくりたいと思います。

この美術館は、気軽に作品を持ち寄って展示できるようにしたいと思います。
夢のひとかけらに希望を託し、諸方面の創作活動が進んでいくことを心から願っています。

2019年2月12日

皆様へ

勝山の肉体は少々遠くへと行きましたが、皆様と一緒に勝山の残した希望を叶えられたらと思います。一緒に何かしようと思われる方、お名前とご連絡先をお知らせ下さるよう、お願いいたします。